

共 訳 の 試 み

—— J.F.パワーズ作「お気に入り」のご逝去 ——

武 田 雅 子

パトリック・シュエマー

(イェール大学東アジア研究科修士課程在籍)

要旨

翻訳する際に、原本の言葉と翻訳する言葉のそれぞれのネイティブ・スピーカーが共同作業できればよいのだが、現実にはなかなかその事例は見られない。(英語と日本語に限定すると)そもそも日本語ができるネイティブ・スピーカーは日→英の翻訳作業に関わることの方が多く、それに共同訳には、訳の検討に莫大な時間がかかる。あげく、言語的にはより正確なものができるが、流れのよい、読みやすい日本語になるという保証はなく、むしろ1人でする作業の統一感を欠くおそれがあるからであろう。武田(以下T)は、長年翻訳に携わってきたが、このたびようやくネイティブ・スピーカーとの共同訳の機会に恵まれた。この作品は Schwemmer(以下S)に紹介されたものだった上、作品そのものの理解において、Sのアメリカ中部出身、ドイツ系、カトリックなどのバックグラウンドの知識がどうしても必要なものであった。さらに、Tのこれまで関わってきた翻訳はほとんど詩であったため、散文の翻訳は共訳が望ましかった。今回の共訳はこのように好条件が揃った賜物である。翻訳に当たっては、まずTが試訳をつけ、それに対しSが各行に4、5箇所添削を加え、それを両者で検討した。この過程で、様々な興味深い言語上・文化上の問題が出てきてそれもまとめたが、ページ数の関係で、「英文学会誌」紀要に譲る。本稿に収録したのは、作者紹介・訳・注である。

J.F. パワーズについて

古い考えの、独裁的な上司。成り上がろうと必死なゴマすり専門家。人はいいけど鈍くさく、窓際族としか言えないような同僚。理想に燃える、あまりにも世間知らずの邪魔な若造。無教養でうるさく、田舎臭いお客。このようなキャラクターはどんな職場にでもいると思われるが、その職業が世界で一番尊いはずの、神を知り、人を救う、神父という仕事ならば? J.F. Powers (1917年-1999年)は諷刺に赦しをも込めて、平凡な神父たちの日常生活を繊細で簡潔な散文で描くことによって、愛や恵みがどのようにして現実の人間に働くのかを追求した作家である。

作品

1947年 *Prince of Darkness* 『闇の主君』(短編集)

- 1962年 *Morte d'Urban* 『モルト・ド・ウルバン』（長編）〔全米図書賞受賞〕
1969年 *The Presence of Grace* 『恵みの臨在』（短編集）
1975年 *Look How The Fish Live* 『魚がどう活きるか、見よ』（短編集）
1988年 *Wheat That Springeth Green* 『緑にいつる麦』（長編）
2000年 *The Stories of J.F. Powers* 『J.F. パワーズ短編集』（全集）

「お気に入り」のご逝去

午後はほとんどネズミ捕りをして——これは僕にとっては決して食糧ではなく気晴しなのである——うちの裏口から始まって両ダコタ州へと何百マイルも広がる、日のじりじり当たる原っぱで過ごした。隠密作戦をとっても、イナゴのためにたいした収穫が望めないとわかって、やがて狩りへの思いは諦めた。こんな有様ではとうとうとするのも覚束なかったが、どうやら眠れたみたいだ。ともかく、夕食に遅れ、お陰で二人の宣教師とのお見知りおきの場は食事時ということになった。ここに来る人はたいていそうだが、この二人も、僕がモルト神父^[1]の右の椅子に座を占めるのを見て驚いた。

モルト神父は（まあそれを会話と言っていいならの話だが）会話をいったんやめて、いつもの好々爺らしく言った。「お二人の神父さんや、これがフリッツ^[2]じゃよ」

この新来者をまずじっくりと見てやったが、こうすれば人が猫好きかどうか間違いなくわかる。この二人組のうちで、牛耳っている嫌味な年上の方が僕を好きでないというのは見て取れたから、今後用心するに越したことはない。もう一人の方が僕を気に入ったのは明らかだったが、神学校から出たばかりという感じでどうでもいよいやつだった。嫌われ、好かれて五分五分だが、これではなんかそれ以下の気がした。

「わしの助手」とモルト神父は僕を指して言ったが、その結果知らない間に、テーブルの向こう側にいる、ずんぐりしたやつは仲間外れになった。かわいそうなこのバーナー！ 今じゃ、彼を敵と見なしているが、何か別のものだとな納得できた時期もあった。でも、彼は敵なのだ。初めから当たっていた。あの時、彼が（彼なりに！）仲良くしようとしていても、どんなに僕を憎んでいるかを知らせてくれたのは本能以外ではありえなかった。（彼の偏見は気質というより後で身についたもので、今の段階では、部族としての猫全体ではなく僕だけに限られていた——そこでは彼に分がある。ほら、死んでも僕は公平に扱うつもりだよ）

僕は人間を観察してきた結果、僕たち、つまりバーナーと僕のいずれかが最後には相手をやっつけなければならないと考えるようになってきている。僕としては、これがモルト神父の鼻根というちゃんとした地位ゆえに、勝つべき戦いだとしたら恐れなどなかった。しかし老神父はますます歳を取り、お墓は招いているし、バーナーも後ろから押しているとなれば、あとどれだけでもつのだろう。それはすなわち、どれだけこの僕がもつのだろうということだ。不運にも、どの司祭館においても一番ものを言うのはもろ権力で、現状では、モルト神父がここで権力を握っている限りにおいてのみ、僕は安泰だ。できるのかな、ありえないことながらしばしばその思いに

かられるけど、まさかバーナー神父と和解し調停を結んだりできるのだろうか。とんでもない！しかし、次のように考えるべきだろう——どれだけとんでもないのか。(結局、バーナー神父が司祭職を継ぐという噂に僕が組しなければ、こうしたことで悩んだりしないだろうけど。)というのは、ここが気に入っているのだ。許して忘れろっていうのは僕の本質ではない、特にバーナー神父に関しては。しかし、必要ならば(国どうしがするように)人と妥協するという気はあり、この解決法を取っても一滴の善意も要りはしない。そんな話し方をして、来世で大変厳しいらしいその結果を食らうことは、ご機嫌取りの犬にはできないだろう。策略に協約。この「お気に入り」という召し出し^[3]には何か致命的なところがあるが、僕にふさわしい唯一のものだし、土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。^[4]——とまあ色々考えれば、「お気に入り」としていただく報いはそれなりのものだ。

「僕たちはよくシカゴを通ります」と、年上の宣教師が言った。これで僕が部屋に入った所まで話を戻したらしかった。そうそう、モルト神父はその晩シカゴの会議に出発するんだった。彼の代理をし、おまけに40時間の黙想も行なうことになっていた宣教師たちは、この教区に入っただけの修道会に属していて、いい印象を与えようと躍起になっていた。少なくとも今のところは、最初のお試し特別サービス期間のようなもので、彼らはお安く手に入った。彼らのお蔭で、それまで出かけられなかった神父も去年の冬はフロリダの味^[5]を知った。

「時にはシカゴに泊まりもします」と若い宣教師はぺらぺら喋った。地方巡業をまだあまりしていない野球の新人選手のように。

「うちの施設があります」と最初の神父が言った。彼の聖職名は——神の御前に誓うけど^[6]——フィルバートであった。今後、バーナー神父は名で呼ばず苗字で呼んで、この名を直接口にする気まずさを避けた。モルト神父は、「フィルバート」と聞いても違和感を覚ええないような人間で、いざれにしても、彼にこんな名前を覚えさせようとするのは期待すぎというものだ。

「どんな施設かいのう」とモルト神父は尋ねた。補聴器をそばだて、説明^[7]を待ち望んだ。

フィルバート神父は叫ぶように「うちの組織の修道院ですよ！」と答えた。

モルト神父は補聴器を指でいじった。

バーナー神父はフィルバート神父のために通訳を買って出た。「神父様は何でできているかを知りたいようです」

「赤レンガ——赤レンガ造りです」とフィルバート神父は声を張り上げた。

「うちのも赤レンガ造りじゃよ」とモルト神父。

「拝見しました」とフィルバート神父。

モルト神父は補聴器を彼の方に突き出した。

「そうですね」とフィルバート神父はまた叫んだ。

モルト神父はうなずいて、私に魚一切れをくれた。断食日の金曜日にしても、たいした食事とは言えなかった。^[8]今の家政婦を見送ることになっても惜しくはないぞ。

「わかった、わかった」とバーナー神父は、戸の後ろに潜んで、いつも食事の終わるのが最後になる彼を待っている姿に向かって言った。「そこに立って、戸の隙間からこっちを覗いていや

がって」と彼はこぼした、「罪人気分させる」。家政婦は部屋に入ってきた。バーナーは若い宣教師に向かって言った（彼は若者を問い詰めるのが得意だった）。「神父さん、あのケスラーと言うやつの本は何か読んだ？」

「イエズス会の人ですか」と若い神父は尋ねた。

「いやあ違う。なんか作家だ。君の言うのも知ってるけど、名前の綴りが違う。本を書いたやつだ——護教論をね」

「ああそうです。とても……」

「退屈だな」

「まあ……」

「こっちは悪くないよ。時代に先んじている作家だな——15分ぐらいね。牢屋とか収容所のところはうまいんだ。やつの本を読んでみたら、その中で生まれたかと思うほどだ」。バーナーは若い宣教師を完全に無関心な眼で見た。「だけど君は読んでいないんだものな」

「ええ。カトリック信者ですか」

「オーストリア人か何かだよ」

「はあ」

家政婦は皿を下げ、デザートを配った。バーナー神父の所に来たとき、彼は「今日は何」とそっと聞いた。

「プリンです」と彼女は答えた、彼が望んだようにささやきもせず。

「パンのプリンかよ」今や脅しにかかっていた。

「はい、神父様」

バーナー神父はぶるっと震えて「僕、デザートなし」と皆に宣言した。家政婦が台所に退くと、「モルト神父が彼女を病院で見つけたかと思う時もあれば、時々、神父さん、おたくの素晴らしい施設のどいつかから来たかとも思うよ」と、これは若い宣教師に向けたのだった。

でも、冗談がわかったのはフィルバート神父で、彼は笑った。

バーナー神父はますます大胆になった。「ルイヴィルで君たちの修道院に泊まった時のことは忘れられないなあ。神よ、勤弁してくれ。実はダービー^[9]で——行ったのはほんの一日だけ——じゃなかったら、食事の件でローマ本山に文句を言ったところだった^[10]。ここでさえましなのを食べたことがあるかも」

テーブルの反対側では、モルト神父が、一言も聞こえたはずもないのに、突然眼をパチクリして微笑んだので、宣教師たちはコメントを求めて彼の方を見たが、何も返ってこなかった。

「僕の言うことは聞こえてないよ」とバーナー神父。「それに、今ニュースを聞いていると思う」

「いや、ラジオ付きとは知りませんでした」と若い宣教師は言った。

「そうだ、ちっ」

「冗談だよ」とフィルバート神父。

「そうだろうとは思っていたのですが」と若者はくやしそうに言った。

「冗談だってわかっていたか」とバーナー神父。それからフィルバート神父に真面目な調子で言った。実は相手にしたいとずっと思ってきたのはこちらの方だった。何しろ若い方は見事なまでに彼のお好みではなかったからだ。「神父、あの新しいオールズ^[11]に乗ってきたのはあんたかね」

「僕のではないけど」とフィルバート神父は本気なら受け止めがたいほど慎ましく^[12]言った。でもバーナー神父はしっかり理解した。かくしてますます仲良くしていくお二人さんだろう。

「やるなあ。パワーではキャデラック並みとか。その色は何と言う——ネイビーブルーか僧服のネズミ色か……」

「どう言えばいいのやら。弟のもので……弟はミネアポリスの信徒で——聖シュテファン教会^[13]でですね。今回の旅のために貸してくれたんです」

バーナー神父はにやっと笑った。僕と同じく、フィルバート神父がこの点をやたら強調すると思っていたに違いなかった。「さっき通り過ぎたんじゃないか」と彼は言った。「どうしたんだ——ここを見て入りたくなくなった？」

モルト神父を無視していいのがわかってきて、フィルバート神父は慎ましく笑った。「ここかどうかははっきりわからなかったんで。教会の向こう側の家は、でも……」

バーナー神父はうなずいて「いい家だろ。フリーメーソン^[14]のだ」

フィルバート神父はため息をついて言った。「やっぱりね」

「いや、いいよ」とバーナー神父。「コロブス騎士団^[15]より好きだ」。バーナー神父はふさわしい観客さえいれば、広い心を見せるのが楽しかった。彼はフリーメーソンの大きな家の方を見つめながら「いっしょにゴルフもした」と言った。

若い宣教師はぎょっとしてバーナー神父を見た。フィルバート神父はただ微笑んだ。バーナー神父はもてあそんでいた大きなパン屑を、僕の方に発射させた。

「ベルは鳴ったか」とモルト神父。

「神父の社内放送だ」とバーナー神父は説明した。「言ってやらないと」と若い宣教師に言った。「君の方が近い。あの電池では俺の電波が入らないんだ」

「ノー・ベル」と若い宣教師は初級英語と身振りでわかってもらおうとした。

モルト神父は、やっぱりちがうかとうなずいた。

「ところで、どうだい」とバーナー神父。

フィルバート神父はためらって、そして聞いた。「ここがですか」

「そんなこと聞くわけない」とバーナー神父は笑いながら、「オールズの話だよ。どうだい、ハイドロマティック^[16]とか」

「冗談じゃありません、神父さん。僕のじゃないんです」とフィルバート神父は強調した。

「はい、はい」とバーナー神父は明らかに信じてなさそうだった。「清貧の誓い^[17]を出して見せるのだけやめてくれたらいい」

そしてフィルバート神父の手をつけていないパン・プリンを見て——「もういいかな」——と言い、十字を切って、テーブルから立ち上がった。チーズをくれていたモルト神父が片手で払っ

て合図したので、あとの二人もついていった。バーナー神父はこちらにまわってきて、僕の椅子にぶつかった——そうそうわざとだよ。モルト神父の後ろに立ちその耳に叫んだ。「今日の午後、僕に何か電話はありました？」彼はいつものごとくどこかにお出かけだったのである。留守中に何か起こるといつも期待しすぎだと僕はよく思った。

「何かあったのお……」とモルト神父は弱い記憶力を絞った。

「それで？」

「うん、思い出した——間違い電話やったのお」

バーナー神父はいらつき、落ち込んだふうに部屋を出た。

「またかけ直すと言うとった」とモルト神父はバーナー神父の失望を感じ取って言った。

僕が部屋を出たとき、モルト神父はテーブルでシャンデリアのオレンジ色の光の下、聖務日課を祈っていた。僕は居間に行き、バーナー神父と宣教師たちを観察できる、前のベランダの窓際のいつもの場所に陣取った。若い宣教師は、ブランコに乗り聖務日課書を手にしていた——きっと蚊がそのうちやってくるだろう。例の二人は、タバコを吸い、テーブルを待っているビリヤード場の客のようにそこらへんに立っていた。フィルバート神父の声がした。「見に行きましょか、神父さん」

「ああ、それもいいな」とバーナー神父。

二人が縁石に停めてあるネズミ色のオールズまで、前の歩道を降りて行くのが見えた。バーナー神父がハンドルを握り、二人は走り出した。すぐに戻ってきたと思ったら、車の動きは変になっていた——これに気付いて、僕は結構うれしかったが、結局バーナー神父は単にブレーキを試していただけだった。それから、本当に二人は行ってしまい、しばらくして、もう戻ってはなくて、これは広い田舎道での愉快な鳥殺しに出かけた^[18]のだろうと思った。

その晩、教会の役員で案内係をしている人たちが司祭館に立ち寄ってみると、トランプのピノクル・ゲーム^[19]をしに来るときとは雰囲気は違っていった。中の通路の案内係しかやったことがない、皆のリーダーのバウマンさんは、前置きもせずに、モルト神父に旅行鞆を贈呈した。「みんなからです」と言ったが、皆同額出したはずはないから、なかなか彼も気を遣っているなど思った。暮らし向きがいいのは金物屋のバウマンさんと薬局のケラーさんだけで、値引きを考えてもこれほど上等の鞆のためには相当出費を覚悟せねばならなかったはずだ。

モルト神父は六人の案内係すべてに万遍なく小さくうなずいた。「いやあ、こんなことをしてもらわんでも」と言い続けた。

案内係たちは、彼の感謝の言葉をかわそうと、ぺこぺこし、モルト神父にはまだ恩返しはしていませんと、むにやむにやし続けた。ケラーさんが進み出て、モルト神父に様々な留め金やファスナーの使い方を教えてみせた。鞆の中にはもう一つ贈り物が入っていて、それは軍隊用ブラシ・セットだった。神父が自分では見つけられないのではと明らかに彼らは案じていた。しかし、彼は留め金を開けてブラシを取り出し、さすが人気者のベテランらしく、ブラシの剛毛に唾を吐きかけてから、ぼんぼんと頭を磨くふりをした。案内係は皆笑った。

「こりゃかっかしい」と新米の案内係が言った——そのなかで唯一人の若者だった。ケラーさ

んは彼を店の事務員に雇い、教会での案内係の交代要員にしてやり、徐々に彼をバイクから離していった。若者はケラーさんと共に、バウマンさんの力に対する防波堤を築いていたが、同盟の相手がこの若者なら、居ない方が多分まじだった。年上の人たちのほとんどは彼が案内役をこなすのを前向きに助けるふりをしながらも、彼が献金集めをしきじって、列を飛ばしたり、重ねて廻ったりすると、ひそかに喜んでた。

ケラーさんは十セント葉巻の箱を差し出した。それは、彼からの個人的な贈り物ということで、皆は驚き苦々しく思った。これも皆からの贈り物ということにするほど彼は大物でもなかった。しかし、皆の恨みを買くと予想したので、今度はマグネシア胃薬^[20]の瓶を差し出した。誰もこのコミック的効果を否定できなかった。モルト神父が懺悔室でもこの青い瓶を薦めるのはよく知られた話なのだった。

「ははあ」とモルト神父。誰もが笑った。

「旅行中に胃がおかしくなったらですね」と薬屋が言った。

「やっぱし最高じゃわあ」とモルト神父は大真面目で言う前から、前にもこう言い過ぎていることを自分でも気づいた。葉巻を皆に廻した。箱は手から手へと渡ったが、薬屋の事務員以外は誰も取ろうとしなかった。

モルト神父はこの様子を見て、賢明にも改めて鞆の札を言って、案内係たちのもつ気前よさとはこんなものだを抱いている自己イメージとぴったり一致するまで、自分こそお世話になっていると言ひ募った。確かに誰もそんな鞆を持ったことはなかった。神父は鞆を家政婦のところに持って行き、もう詰めてしまった服を古い鞆から新しいのへ移し変えるように頼んだ。戻ってきてみると、案内係たちはまだそこらへんに立って、鞆のことで気をよくしたり葉巻のことであまりよくなかったりしていた。その件はまたあとで話し合うだろう。神父は皆に座るように促した。できるだけそばにいてほしかったようだ。彼らは確かにモルト神父の友達だったけど、バーナー神父が避けるのも無理はないと思った。案内係がやって来ると彼はいつも何とかして外出していたが、今もそうだった。彼らに好き放題させてきたモルト神父の後をバーナーが継ぐことになるものなら、彼らはまず困るわけだ——僕の次にね！　どンドン都会化していく中で野暮たいままの小教区では、モルト神父が中心ならば彼らは本体にあたるのだった。彼らは時には着飾って、地獄を訪ねる消防夫の如く、セント・ポールとミネアポリス^[21]という「都会」に立ち寄ったが、この僕たちの堅苦しく小さい高速沿いの町ほど、品がなくぼろっつい場所は他に考えにくいだろう。シャーウッド^[22]と名乗りながら、緑陰はテニスコートの程度ぐらいしかないのだ。

皆は普通の人だった——都会の同輩たちほど抹香臭くはなく——騒がしく、足音もどっしりと、冬には長い下着を、そして一年中ドブネズミ色の背広を身につけていた。彼らの考える良き時代（ピルスナー・ビール、紙帯を巻いたまま吸う安い葉巻、それにピノクル）は、彼らの考える「善行」とぴったり一致していたのだった（賭金を集めるたびにその何パーセントかは教区の建築基金に進呈した）。婦人たちも活動的で、教会の地下でトランプをし、バニラエッセンスやくじを売った——たいてい売りあいっこをしていたらしい——そして原価以上の利益はいわゆる「布教活動」にすべて廻された。この晩、時間の都合でいつものピノクルができそうになかったのはあり

がたかった（彼らはどんとどんと机を叩くので——食卓と同じくらい僕にもこたえるのだ——肉切りまな板でゲームするべきだとよく思った）。

案内係の面々は、居間のそこそこに落ち着き、モルト神父のシカゴ旅行について話し出した。家政婦はビールを配った。

「どれくらい行くんかいのう、神父様——3日っすか」と1人が尋ねた。

モルト神父は3日くらいだと答えた。

「3日っすか！今日が金曜で、明日が土曜、日、月と」。一番若い案内係が指を折って数えている間皆は待ってくれた。「火曜日にお帰りか」

神父は頷いた。

「日曜は誰が代わってくれる？」

ケラーさんが神父の代わりに答えた。「宣教師の神父さんたちを呼んどる」

「宣教師かい！」

それで、一番年若い案内係はおはこの2、3の話題のうちの一つを繰り返し始めた。「ねえ神父様、まだあったら、軍の事務局に忘れず立ち寄ってくださいよ。戦時中は僕、 χ （カイ）号隊^[23]にいました」と彼は言ったが、誰も聴こうとしなかった。

バウマンさんはモルト神父を攻めて、例の場所がどこか説明しようとしていた——世界博の時食事した、ウエイトレスのうち1人はミネソタ出身だったあの場所を。もうこの話にはうんざりだったし——次は封筒の裏に地図を描いてあげるんだろう——それに僕はバーナー神父がさっき帰って来たのを聞き取っていた。様子を見に階段を上った。しばらくの間、彼の部屋の外で聞き耳を立てた。フィルバート神父につきあってもらって、予想通り、モルト神父の悪口を言っていたが、話は進んで、昔、モルト神父が大司教からシャーウッドの任命を受けた時の例の有名な質問に至っていた。つまり、「そこにやあ、ええ肉屋さんがあるんかいのう」

フィルバート神父は笑った。彼がグラスをすすって椅子のそばに置く音が聞こえてきた。僕は部屋に入って、二人が何を飲んでいるか知りたかったので、裾板に近く、影の中のように進んだ。フィルバート神父のグラスを嗅げる位置に回り込んだ。まさか、スコッチか。これこそバーナー神父がフィルバート神父を友人と認めた証拠だ。その時は、単なる宣教師から彼が何を得ようかと期待しているか、思いつかなかった。二人が同じ穴のむじなであると先に考えていたのは何と正しく予言的であったか、この時わかっていなかったのは僕のミスだった。バーナー神父が、相手のためであれ、相手がいるときの自分のためであれ、本物のスコッチを出してくるのはめったにないことだった。たいていのお客には何も出さなかった——司祭館に寄ってくる禁酒一筋のやつは数がなかなか多いので、これは安全な方針だ——飲みたがる歓迎されざる客には「スコッチ風味」のウィスキー瓶を置いていた。これは洒落た瓶に入っていた、のど越しのいい、いぶし味の家具磨きのブレンドであった。水割りにしてもまずく、安物だったが、戦争の終わり以来かなり入手しにくかった。その稀覯品の瓶を引き出しから得意そうに、まるで彼にとって実在にありがたい機会であるかのように引っ張り出すのが常だった。それでも、彼はその代物には手を出そうとせず、自分の好みは単純で、俗世のすべてのものに対して見る眼がない男であるというふう

にふるまい、飲むとすれば、ここで取れたブドウの素朴なワインの方がいいと言わんばかりだった——まあブドウが取れたらただけだ。なかなかの演技だったが、彼もすっかり楽しんでた。浄水のグラスを持ち「神父様のお酒はどうですか、薄くないですか」とか言って。

家政婦がドアのところの姿を現し、予定が変わり、案内係の何人かがモルト神父を汽車まで車で送ることになったと言った。

「もう行ったのか」とバーナー神父。

「まだです、神父様」

「じゃ、俺の代わりにさよならと言っておいてくれ」

「はい、神父様」

彼女が姿を消すと、彼は言った。「自分でも言えたけど、あの連中と出くわしたくないからなあ」フィルバート神父は笑った。「シカゴで何があるの」

「スティーブンス・ホテルで、司祭・建築士相談会があるんだ」

「何か作るつもり？」

「いや、でも司牧だから見本がただでもらえるのさ。何も買うわけじゃない」

「この職場はあまり賑やかでないのかね」とフィルバート。

この質問はバーナーが食いつく餌だった。「神父は裏庭に池を作ったさ——あの雑魚（じゃこ）のためにね。彼の司牧期間中の建築プログラムはせいぜいそのくらいだよ。もっとも少しの間しかいないけどね」

「どれくらい？」

「14年」とバーナー。彼こそ誰にも負けない建築家になるだろう——機会さえあれば。彼はタバコに火をつけて笑った。「シカゴに行く本当の理由は、野球の試合を見るためなんだ」

フィルバート神父は笑わなかった、「今どこが試合してる？」

相手の示した興味に少しいらついて、バーナーは言った。「レッド・ソックスだと思えます——いや、レッズかな。畜生、知るか」

「レッズのはずはないよ」とフィルバート。「先週僕とぼうず^[24]とはシンシナチにいたけど、レッズは長いホームゲームの始まりだったもんな」

「そうか」とバーナー。

カーディナルズのファンであるフィルバート宣教師が、ナショナル・リーグのペナントの行方を分析している間、バーナー神父はすねていた。「一番いいシカゴ発ワシントン行き列車はどれだ」と突然尋ねた。

フィルバート神父は知っている限りを言ったが、それは数年前の情報だと認めた。「ワシントンへの行脚はもうしないのでね」

フィルバート神父は、自分の行脚をカーディナルズに合わせたということは脇において、笑った。「神父さんはこうしたことは知らなかったんじゃない？」

「こうしたことは知らずにいられないのさ」とバーナー。「ここでも、前の所でも、その前でも、神学校でも——ボールにバットに神というわけだ。郷に従えなんて、地獄に行く方がまだだ」

「名誉のためにはいくら払う^[25]？」とフィルバートはまるで異教の匂いをかいだかのように尋ねた。

「わかっているよ。そのせいでたぶん緋の帽子^[26]を失うんだろうな」とバーナー。まだ田舎の主任司祭にもなっていない男のくせに大胆不敵な発言とあってよいだろう。彼の思いのありかが確認できた。彼は実現不可能な野望を軽く口に出すことで、慎ましい野望を隠せるわけはなかった。「高位聖職者の皮をひんむけば、その下に二墨手でも見つかる^[27]」と彼はいきまいた。フィルバート神父は話題を変えようとした。「誰かから聞いたのだが、モルト神父は教区の悪魔祓い担当だそうだね」

「昔な」バーナー神父の目は悪意で揺らめいた。

「やり過ぎたってわけか」とフィルバートは尋ねた——まるで何も聞いていないかのように！

「まあな」僕としてはバーナー神父がもっと言うかと思った。かなりあやしげな話もいくつかできたはずだ。そのすべての要点は、エクソシスト^[28]としてのモルト神父がおそらく引き金を引くのが少し早過ぎたというものだった。しかし、だいたい家畜対象に限られていたから、人間としては助かったけれど。^[29]

「かなりのスキャンダルになったか」

「まあな」

「でも、深刻なことはなかったんだろう」

「うん」

「何を深刻と言うかによるだろう」

バーナー神父は返事をしなかった。妙にむっつりし始めていた。おそらく、お情けでやさしくされていると感じたか、それともモルト神父の悪口を言う機会をこんなに与えて、フィルバート神父がそそのかしている、と感じたのかもしれない。

「誰がアコーディオンを弾いているんだ」とフィルバートは階下の音を聞いて尋ねた。

「ご本人だよ」

「まさか！」

「そうさ」

「自分が弾いているのがどうして聞こえるんだ」

「どうでもいいじゃないか——アコーディオンを弾いているのなら」

フィルバート神父は笑った。彼は葉巻からセロファンをはずしたが、そのとき僕に気づいた。そしてその瞬間、僕は隠れようとはしなかった。「ほら、あの神に見捨てられた猫だ」

「やつの助手だ！」とバーナー神父は驚くほどの苦味をこめて言った。「継承権を持った補佐さ」

フィルバート神父は、セロファンを丸めて、ゴミ箱に投げたがはずした。

「拾え」と彼は僕にたわいもないことを言った。

僕はそれを無視し、ゆっくりとドアの方に歩いていった。

バーナーはお見事な脚ですばやい動きをしたが、彼が立ち上がらないのを知っていたから、僕は悠然としていた。

フィルバートは聞いた。「彼女、ネズミを捕れるかね」

彼女って！^[30] 司祭館で暮らすようになってから、確かにずっと貞潔を通してきたが、言わせてもらえば、僕は誰にも負けないほど男らしいのだ。しかし事を正してくれてもよかったはずのバーナー神父は何も言わなかった。

「ネズミ捕りにはかなりのデブだよな」

そのとき僕はこのかわいそうなやつを睨みただけだったが、ネズミ捕りにこれほど関心のあるやつはちょっとネズミ捕獲器という道具を知ってるのではないかという気持ちで、最後にもう一度ねめつけてから、そこを去って彼らを二人だけにしてやった——そんな相手しかないことでお互いに罰し合えばよいと。

僕は廊下をぶらぶら行き、最後にネズミを捕まえた時を思い出そうとしていた。若い宣教師のいる部屋を通り過ぎたとき、中で一心に祈っているのは確かだったから、閉まっているドアに向かって微笑んだ。

翌朝、いつものように台所で朝食を取ってしばらくして、涼しい果樹園に向かった。今日のような日にはよく行く所だ。上の方で木から木へと飛んでいるスズメにはまったく食欲がわかなかったが、彼らにそれを納得させる手はありそうになかった。どいつも虚栄心があまりにも強く、自分はすこぶる美味だと思っていやがる。ピーピーと平安を叫ぶが、平安なんてありやしない^[31]。とうとうそのうるさい囁きに飽き、敷き詰めた草から立ち上がり、そこを離れた。耳を倒し尻尾を振り回して、オスに妙技をふるって跳ぶ気にさせ、若いメスを恐がらせるのが面白くて、攻撃するふりをした。

それから、別のお気に入りの場所に出かけた。教会と煉瓦の歩道との間の緑陰にある区画だ。しかしここではアブが僕を見つけ、その上、野良犬と子供たちの姿が浮かんで、常ならぬ安息なき夜のあと、ものすごく必要だった睡眠を邪魔した。

午後になって、そうだ土曜日だった、司祭館を独り占めできる、と思い出した。バーナー神父と宣教師たちは告悔で忙しいだろう。今頃は、気温もピークに達し、若い宣教師には気の毒だけれど、残りの例の二人が告悔室で汗だくになっていると考えるとせいせいしたと認めねばなるまい。午後の残り、正義の者の眠り^[32]に近い眠りをむさぼったようだ。

僕を起こしたのは皿の音だったかな。顔を洗う間も有らばこそ、急いで食堂に行き、テーブルのいつもの場所に陣取った。その時になって初めて僕の隣の空いている椅子のことを考えた——完全なる淵^[33]。いつか直面せねばならないことの前兆だと思った——この淵と、テーブルの向こう側でくちやくちやくやっているバーナー神父。あ、この問題もある——僕に給仕してくれる人がいない。若い宣教師は僕に微笑んでくれたけど、微笑みはどのように食べられる？かなりぐたつとした例の二人は——僕はやつらの保温室へのお早いお戻りを願ったのだが——消え入りそうな声で罪の保留^[34]について話していて、僕に気付いているふうはなかった。モルト神父のいない我々の最初の食事は、しかしながら何事もなく終わることはなかった。若い宣教師が細長い肉片を僕にくれようとしたとき、事は起こったのである。

「おい、やめろ！」とフィルバート神父が言った。「そんなことをしたらネズミ捕り猫にならないぞ」

「この一切れだけですから」と若い宣教師は言った。肉はもう僕の口の中だった。

「まあ、これから見てろよ」とフィルバート。「これから」という言葉を聞いて僕は不安になった。僕の台所の食糧も打ち切るよう彼が手を打ったということなのだろうか。モルト神父が帰るまでネズミ捕りか断食か選べというのだろうか。

これらの憂鬱な道筋について考え続けた。僕にとってはまだ始まらなかった食事であるが、彼らにとっては食事は終わった。そこで、僕はすばしっこく台所に入っていった。いつもの椀にミルクがあった。しかし、僕がメイン・コースを食卓で取るのに慣れている家政婦は、僕の人生には何の変わりもないと思ったのか、今やあの悪者たちからの指示で動いているのか、わからない。あいつらの卑怯さに気分が悪くなり、全然食欲がなかった。主任司祭がいなけりゃ、助任が遊ぶ^[35]ということになるのだね。概して僕はかなりふさぎこんでいた。

日曜には正餐を正午にとるとというのがうちの習慣だった。僕は早く、皆より先に行った。覚えている限りのいつよりもお腹がすいていたのだった。この食卓では、ほとんどというか、まったく食事を期待していなかった。一つの目的のためにそこに行ったのだ——自分の権利を主張すること——そして多分あの若い宣教師に関しては、僕への同情、そして僕の迫害者に対する侮蔑を掻き立てること。今になったら迫害者というのがあいつらの名前だとわかっていたのである。

食堂に入ってきたのは、彼ら二人だけだった。

「ぼうずはどこだ」とバーナー神父が尋ねた。

「気分がよくないんだ」とフィルバート神父。

それはそうでしょう。二人は示し合わせて、彼に6時のミサも11時のミサをもさせた。というのは当然、その間断食していたのだ^[36]。それに、彼はあまり頑丈なタイプとは思っていなかったね。

「家政婦に肉のスープかなんかを持ってやらせよう」とバーナー。まったくご立派だねと思っていたら、突然さっと振り向いて僕を椅子から追い払った。それから、椅子を持ち上げ、壁に立てかけた。それから、テーブルの下の席まで行き、自分の皿と食器を取って、モルト神父の所に置いた。いきり立って独り言を言いながらモルト神父の椅子に座った。あいにく僕はあんまり勇ましくは見えなかった、自分の椅子の下にすくんでいて。

面白そうに見ていたフィルバート神父は今や新しい席次を声援で歓迎した。「やったぜ、アーネスト！」

バーナー神父は自己正当化を図り始めた。「ここが明るいんだ」と、さらに「猫は鳥を殺す」と言い、そしてなぜかふうっと荒い息をしていた。

「殺すのはネズミにしておいたら、それほど悪くもないだろうに」とフィルバート。まったく彼こそは一途に思いつめるやつだった。

「あの黒い悪魔めは生涯に何匹捕ったのかな」とバーナーは、僕のような色合いの猫に対する

世間一般の偏見を誇示した（僕は白襟模様^[37]もついているのに）。そして、僕を見越して「シュー」と脅した。しかし、僕は自分の持ち場でがんばった。

「いつでも犬がいいよな」と平々凡々たるフィルバートは言った。

「俺も」

しばらくして——その間彼らはロースト肉と懸命に格闘していた——フィルバート神父は言った。「田舎の方にドライブしてやったら？」

「畜生。戻ってくるだけだ」とバーナー。

「ちゃんとやれば、戻らないぞ」

「だがね」とバーナー。「僕の友人がセント・ポールの高い橋から猫を落としたんだ。下に、川の真ん中へと沈むのを見たのさ。ミシシッピー川のことを言ってるんだよ、わかってるよね。そいつを眼にすることなど二度とないと思ったんだ。思ったけどね。さて、そいつは皆より先に戻っていたよ」バーナー神父はそこで黙った——フィルバート神父を納得させなかったことを見て取った——そこでふたたび出直してみた。「事実なんだよ、神父。帰る前にゴルフのーラウンドでも廻ったかもしれないけどね。猫は濡れているようにも見えなかったとき。そいつはまだいるよ。ここのと似た話。ただ今では友人たちはその猫をこわがっているけどね」

バーナー神父が不愉快に思ったことに、フィルバート神父は感心するどころか不思議がりもしなかった。ただ尋ねただけだった。「でも、袋を使ったのかい？重石は？」

「石臼^[38]でも、そんなことどうでもいい」と切り返すバーナー。

それから彼らはギャングの埋葬の習慣について議論し出し——コンクリートを注ぐとか——そして熱中して僕のことなどすっかり忘れてしまった。

反対側の壁のところで、僕は彼らに反抗する勇気を静かに掻き立てていた。心がライオンらしくなると感じ、跳びあがって僕の椅子に座を占めた。殴られ怒鳴られると思ったのに、出くわしたのはただの無関心だった。そのとき、彼らが僕の価値をどれだけ低く見始めたかに気がついた。過去の思い出——追放中の高潔な政治家の病い——が僕にとっては強すぎて、復帰の希望はすでに不当なほどかすかになっていた。

食事の最後に、話を僕のことに戻し、フィルバート神父は言った。「もっといいやり方があるかも」立ち上がって、壁から十字架を掴むと、わけがわからないバーナー神父にそれを渡し、僕に「いい子だね」と声をかけながら、耳の後ろをひつつかんだ。「こいつに向けてみる」とフィルバート神父は言った。バーナー神父は十字架を僕に向けた。「見ろ、な」とフィルバート神父は僕の顔に言った。僕はニャーと啼いた。「これでも食らえ！」とフィルバート神父は僕を手首で叩いた。再び僕の顔を十字架に押し付けた。「見ろ、な」と彼は再び言ったが、僕は次に起こることを読み取っていたので、彼が手首で叩いたとき口で向かっていき、きれいにその手首をちくっと噛んでやった。バーナー神父はこの祭儀を理解し楽しみ始めていた。僕はすべてを観察できる立場にいたのに、楽しむとまでは言えなかった。「連想の訓練」^[39]とバーナーはほとんど熱心と言っているほどの不思議な満足感をこめて言った。十字架を僕に突き出した。「もしこいつがきちんと反応するほど利口ならね」とバーナー。「ああ、彼女はちゃーんとお利口さんだよ」とフィルバートは

言いながら手首を吸った。それで恐水病になればいいと僕は願った。彼はサンダルの片一方を引っぱって脱いだ。バーナー神父は不安そうに十字架をいじりながら尋ねた。「これってやっていいのかな?」「こうしたことで大事なのはこころざし^[40]なんだよ」とフィルバート。「僕らの動機は結構はっきりしてる」そこで二人はまた僕に襲いかかった。

サンダルの味を最初に食堂で食らったあと、テーブルから離れてさえいれば安全だろうとおろかにも思っていた。なんかしら僕がそこにいると彼らの獣性——つまり、彼らのほとんどすべて——が引き出されるのだと考えた。しかしその同じ日の夜、彼らは二階の廊下で僕を捕まえた。一匹は僕の上にごろんと落ちかかり、もう一匹は唯一の逃げ道をふさいで。そして今回の折檻は最初のよりひどかった——まず、少し遅れたので僕は執行猶予かと間違っただが、バーナー神父は、「間違いの余地を残さず」などとぶつぶつ言いながら階下に降りて行って、食堂から十字架を持ってきた。もっとも十字架は家中かけてあったけど。若い宣教師は二人が僕を相手にしているところに出くわしたが、きびすを返してしまった、「この件から手を洗います」^[41]と。もっとかかわってくれてもいいと僕は思ったが。

気持ちはうつろ、身体は傷つき、心は痛んで、二日二晩というもの僕は何とかしてどうにか持ちこたえた——仕返しする希望だけがたよりで生きていたのか。とにかく正義がほしかった。それだけでも大した願いだが、それだけではとても満足できなかったのだ。復讐以下のものなど要らなかった。

近所にいるようにして、司祭館は避けた。彼らの戦略は僕を追い払うことに過ぎないともちろん思っていた。姿を見せないことで、僕はささやかな満足を引き出していた。こうして、僕を追放するという彼らの計画が成功したと思わせて彼らを欺いたから。しかしこれが、この辛い時期、唯一の慰めだった。もっとも、この慰めも彼らの罪に比べて何ものでもなかった。

夜は野宿した。飢えでめまいがしてふらふら歩き、ついに年寄りの野ネズミを仕留めた。腐りかけたこの食料は僕にとっては苦い味がして、呑み込むとき、敵に対しての皮肉な譲歩のように思えた。またネズミを食べるくらいなら飢えるぞと誓った。自分自身への報いとして、果樹園のスズメに忍び寄った——このことで我と我が身をのろいながらも、あの愛鳥家たち、僕の迫害者のことを思って余計がんばった。やつらの前に立ち自分の罪の贖いとして言ってやるのだ、「お前たちが僕をこんなふうにしたのだ。お前たちが僕に人殺しの役目を突きつけたのだ」と。幸い、一羽のスズメも隠れ場から追いたてはしなかった。しかし、僕の動機は結構はっきりしていたから、やつらとその理想に対して罪を犯しているという喜びを味わったのだ。羽根まみれの大騒ぎなしに、その喜びを。

3日目の火曜日に、しっかり用心して、ガレージのそばのライラックの茂みに陣取った。モルト神父が戻るまで、昼間は安全でないとわかっていた。神父は夕食時ごろに着いたが、その姿を眼にただけで、僕の中で人間の愛情に近い想いが沸き起こったと認めねばなるまい。セント・ポールの駅で出迎えるため午後を休みにしてもらったに違いない、例の一番若い案内係が、新しい鞆を持って神父に先立ち司祭館に入った。それは僕にとっては来たるべき反革命を象徴する行

為だった。しかし、僕は隠れ場所から飛び出して行ったりはしなかった。こんなに苦しんだのに、今道化を演じるどころではなかった。その代わり、内陣仕切りの戸のところの、やつらがバリケードし忘れたあおり戸を通して台所に滑り込んだ。舞台袖の俳優のように、僕はストーブの下で自分の出を待った。

やがて、やつらが食堂にドシドシとやってきて席を占めるのが聞こえた。そしてモルト神父の声がした、「大司教と長い話をしたよ」（バーナー神父が、「僕のことを何か言ってくれたか」と祈っているのが、もう少しで聞こえたくらいだ）そして、「フリッツはどこじゃ」と。

「最近見ません」とバーナー神父はざるそうに言った。本当のことも嘘も言うつもりはなかった。

「ところで、あの猫にはどこかすごく変なところがありますぞ」とフィルバート神父。「我々が思いますに、彼女はとり憑かれています」

僕は唾然とした。このことを考えるために時間があつたらいいのに、今や僕はすでに部屋に入りかけていた。

「憑いとるって！」モルト神父は言った。「そんな、まさか！」

「ああ、でもそうですよ」とバーナーは言って、すぐ肉に手を出した。「厄介払いだ」

その時に僕はニャーと啼き、皆は僕を見た。

フィルバート神父は思わず僕とサンダルに同時に手を伸ばしたが、うまく立ち直ってしらんぷりをしてから、「早く！」と言った。バーナー神父は十字架を取りに壁の方へ走った。以前、当時はむち打っていない者によって僕に向かって掲げられたその十字架は、あの折檻の不思議かつおそらくは冒瀆的な特徴であった——まるで僕の苦しみの背後にある意志であるかのように。その時もなお、十字架を見ると、押さえられない恐怖が沸き起ってきたので、やつらは僕をよく訓練したことになる。バーナー神父は十字架をモルト神父に渡した。

「さあ、お分かりになりますよ」とフィルバート。

「神父様の判断に任せます」とバーナー。

今や僕はもうどうしようもないとわかった。次のことは彼らには見えなかった——人間の眼には。やつらが僕に叩き込んだ恐怖に僕はすっかり身をゆだね、次の瞬間、やつらの計画通り、本当にとり憑かれた者のように十字架から逃げて、食堂を飛び出し台所へ、そしてそこから盲滅法、家に沿って走り植え込みを突破してとうとう通りで終わった。そこで、パワーのあるドブネズミ色の車が僕を轢いた——そしてそこで、僕は古い霊を捨て新たな霊を受けた^[42]。

と同時に、僕は生まれ変わり、前の恐怖から贖われて、彼らが見る限りでは、以前の僕とそっくりそのまま、それでも人間の世の中で、僕は——まだ十字架をぐっと握って座っていた——モルト神父のところにスタスタと近づき、その膝に飛び上がった。若い宣教師がフィルバート神父の弟の車でお使いから戻るのが聞こえた。夕食に遅れたと彼は思ったが、僕の迫害者の眼に、次第にぎょっとした表情が浮かぶのを眼にするのには、ちょうど間に合った。この表情だけで、やつらの手にかかって僕が苦しんだすべてを埋め合わせてくれた。今やゴロゴロ喉を鳴らしながら、僕は十字架に身をこすりつけて、僕の完全なる復讐を自分で成し遂げた。

「僕たち、何をしてしまった」とフィルバート神父は叫んだ。彼は結局感情的なウスノロで、そのとき僕を聖人にするというなら賛成票を入れてくれたことだろう。

「猫を轆いてしまいました！」と若い宣教師は興奮して言った。「誓って、この猫です。見たら、何もいませんでした！」

「上へ行って休もう」とバーナー神父はうなづいた。彼は座った——ちゃんとテーブルの向こう側のいつもの場所にいるのを見るとせいせいした——それは長い間待つためであるかのように、とまあ、僕にはそう見えた。気がつくとは僕は、彼を別の小教区に移すように仕向けられないかと考えめぐらしていた——悪魔のような主任がいて助手も数人、また一番下から出直せるというところ。

しかし、僕の口癖なんだけど、目先のことを先に、そして万事に好機あり。というのも、今やモルト神父自身が僕の椅子をテーブルの方に引き寄せて、僕を正当な地位に戻してくれていたからである。

注

聖書の出典は日本聖書協会の「新共同訳聖書」による。

- [1] これはビールの“malt”（麦芽）をも連想させる、ドイツ系の姓。
- [2] この猫の名がドイツ系の名であることから、モルト神父はドイツ系であると推測される。
- [3] 原文“vocation”は「職業、生業」の意だが、本来、神に呼び出されて、その職に就くという語源を持ち、日本語の「天職」にそのニュアンスがこめられる場合もある。宗教的には、まさに「神のお召し」を言う。フリッツはモルト神父の「お気に入り」という状況、ポジションを、司祭たちの聖職のようなものとして捉えている。
- [4] イエス様の最も難解なたとえ話とも言われる新約聖書ルカによる福音書 16 章、その 3 節に “To dig I am not able; to beg I am ashamed.” とある。そのたとえ話は結局、この世の物質を賢明に利用して、永遠に続くもの（つまり神の物質である愛）こそ買えばよいとの意であろうか。ただしこの引用の個所は、直前のような犬に対する軽蔑の掛詞的用法（穴を掘ること、ちんちんすること）とも読める。
- [5] 避寒地として有名な暖かいフロリダで冬を過ごすという快適さ。
- [6] 裁判などで真実を言う誓いの言葉 “I swear to tell the truth, the whole truth, and nothing but the truth; so help me, God.” の最後の部分で、「まさかフィルバートなんて名前を聖職名につけたとは信じがたいようなことだけ」というニュアンスがある。なお、フィルバートは古臭い名前であるというおかしみがある。
- [7] 原文“clarification”には「(宗教的) 悟り」の意味もある。
- [8] 金曜日は断食日。これは修道士でない小教区配属の神父や一般信者のために、(魚や海産物を除いて) 禁肉食に和らげることもある。このことから、カトリック信者のいる地域では、金曜日 (Friday) に魚フライ (fish fry) 食べ放題をするファミリー・レストランも多い。
- [9] 有名なケンタッキー・ダービーを指す。アメリカ 3 冠レースの一つで、4 歳馬が 1, 25 マイルを競う。5 月第 1 土曜に、ケンタッキーのルイヴィルで開催。

- [10] カトリックの総本山ローマのバチカンにある教皇庁に、ルイヴィルの修道院では食事が余りにひどいと、告げ口をしたいほどだった、という冗談。
- [11] オールズモバイル (Oldsmobile) の略。アメリカ製の乗用車で創業者オールズの名にちなむ。現在は GM の一部門で作られている。「新しいオールズ」には「新しい」と「オールド (=古い)」の言葉の洒落がある。
- [12] 原文の “meekness” (慎ましさ、柔和さ)には、キリスト教徒において神の祝福を受けるにふさわしい心のあり方というニュアンスがある。「柔和な人たちはさいわいである。彼らは地を受けつぐであろう。」
「わたしは柔和で心のへりくだったものであるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂には休みが与えられるであろう。」(いずれも新約聖書、マタイの福音書、それぞれ 5 章 5 節, 11 章 29 節参照)。これが「受け止めがたいほど」というのは、もしここでフィルバートの慎ましさが真摯なものなら、清貧の誓いをしていないバーナーの立場がなくなるから。
- [13] 宗教上の区域分けは教会ごとに決まっており、ここは聖シュテファン堂のある教区をいう。
- [14] 世界的な男性秘密結社。相互の扶助と友愛を目的とする。歴史上では反カトリック運動でも有名。
- [15] アメリカの男性カトリック信徒の国際的友愛組織。
- [16] 「自動水力」のような意味をもつ、何かの車の特徴を示す科学っぽい宣伝名。1950 年代、冷戦が進む中で、アメリカは本気に消費文化になっていたという風俗世態。
- [17] ベネディクト会、フランシスコ会、ドメニコ会、イエズス会などの修道会では、修道士として、ものを私有しないことを誓う。普通の教区配属神父はこういう誓いを別にしなくてもいいので、例のお二人さんにとって、この話題になると聖性競争になり、角が立つ。
- [18] 文字通りの意味としては、「広い道で鳥類を殺しに出かけていた」になるが、高速道路というものがまだ真新しくかった 50 年代の世態を猫の視点から見たもの。
- [19] 各スーツのエース、キング。クイーン、ジョーカー、10, 9 を 2 組、計 48 枚です、花札に似たゲーム。
- [20] 水酸化マグネシウムの白色懸濁液で制酸剤・緩下剤として用いる。
- [21] セント・ポールはミネソタ州の州都で、ミシシッピ川対岸のミネアポリスと共に「双子都市」と呼ばれる。
- [22] 12 世紀の伝説的義賊ロビン・フッドの住んでいた森。イギリスのノッティンガムシアの王室林。
- [23] 戦時中の隊の名。原文では、ギリシア文字の χ (カイ) の読み、“chi”とあてている。
- [24] 若い宣教師を指す。
- [25] フィルバートはだいたい「高位聖職者になるために野球が好きふりをするような神父は、名誉のために何とでも交換する姿勢が醜い」と言うつもりに過ぎないかも知れないが、「バーナーはこの恨みという『名誉』のために魂を交換してしまいそうではないか」とも捉えられる。
- [26] 緋の帽子をつけた枢機卿になること。枢機卿団とは、世界中の司祭から教皇自身に採択され、教皇の顧問を務めたり、新しい教皇を自分たちの中から選挙したりする最高議院である。ちなみに、日本人で枢機卿になったのは今までで 5 名である。
- [27] 野球好きでないと、「お気に入り」になれず、成り上がれる見込みがないという愚痴。アメリカの田舎

教区ではそうだとしても、バチカン本山で野球ばかり論じ合っている枢機卿たちを思い浮かべているこの被害妄想はあまりにも滑稽。

- [28] 司教は何人かの神父をその教区の祓魔師（下級聖品第三段）として任命して、悪魔払いをする役目を担当させる。
- [29] 「家畜にとっては大迷惑だったけれど」という意味がこめられていて、この表現には猫の視点が意識されている。
- [30] 日本語では必ずしも表現していないが、フィルバート神父は、終始フリッツを牝猫呼ばわりしている。
- [31] 「彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている。」旧約聖書エレミヤ書 6 章 14 節参照。聖書の「平安だ、平安だ」を掛詞のようにして、鳥が「講和、講和」と願っている様子を描く。“there is no peace”も同じく、聖書の「平安がない」および「(眠れる) 静けさがなくなる」と掛けている。
- [32] 預言者サムエルの母となったハンナの凱歌「[主は] 誓う者の誓言を確保して下さり、正義の者の眠りを祝福する」（旧約聖書、サムエル記、上巻、2 章 8 節 5-6 行）参照。この句は聖書の伝統の中で度々現れているが、信頼の置ける写本には欠けているため、編集方法によって、ある現代の聖書にも（日本聖書協会の全ての和訳聖書もそうだが）入っていない。なお、古代ユダヤ教やキリスト教で来世の命に対する信仰が広まったのと共に、「正義の者の（きたるべき死者の復活までの）安らかな永眠」という意味で使われるようにもなったので、ここは「滑稽に死んだのに近いような眠り」とも読める。
- [33] 聖書の“abyss”（大いなる淵、虚空、奈落）のイメージを踏まえている。
- [34] 新約聖書、ヨハネの福音書 20 章 23 節（[イエス様が弟子たちに向かって言った]「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」）に基づいて、秘蹟として信者が罪を神父に告悔して神の赦しを受けるのはカトリックである。その句の後半の施しとしては、根本的にいうと、例えば謝罪・改善する真心がなければ、罪をいくら口で告悔しても神に赦され得ない。そういう場合には罪が保留されるという。神学者は他に色々とした難しい例を挙げて精密に考えるが、お二人さんのような神父たちがそういうところを得意そうに論じるとは皮肉なことである。
- [35] 日本の「鬼のいぬ間に洗濯」に当たる「猫がいなけりゃネズミが遊ぶ」という諺の引用。
- [36] ミサを捧げるためには短くても 45 分が必要だし、信者たちと挨拶や愉快的な雑談を交わしたり、その告悔や悩み話を聞いたりもしなければならぬし、それにミサの中でご聖体を拝領する前に、一時間断食する規則もある。これだけのことを一人でするとするのは疲れる。
- [37] 黒い猫に通りを横切られたら運が悪いという言い伝えがあるのに対して、黒い制服に白い襟をかけた神父のように、自分も首に白毛があるのだから何も不吉なことはないと主張している。
- [38] イエス様が子供たちについて「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである」と言う、新約聖書、ルカの福音書 17 章 1-2 節など参照。この句は目下の人に悪影響を与え、その人を墮落させるのは何よりの重罪だと多くの場合理解されているので、ここでは皮肉な連想は避けられない。なお、猫が文字通り「小さいもの」なのでさらに面白い。

[39] ある事柄から別の事柄を条件反射的に連想するようにつけるということ。連想の内容については物語の続きを読むと判明する。

[40] 原文では、“intention”。カトリックで多く用いられてきているスコラ系の倫理学によると、“actus”、“mens”、“circumstantia”（「何をして」「どういうところで」「どういう状況の中で」、ある行為をするかというラテン語）の三つの要素が全て正義であれば、その行為は正義である。逆にそれらの要素の一つだけでも不正であれば、その行為は（いくらか）不正な行為になってしまうのである。これらの用語は法律学でも使われている。滑稽なことに、それらの要素が三つとも大事なはずなのに、フィルバートはこころざしだけで全てをカバーしようとするによってカトリック倫理に反しているし、その上、彼とバーナーの今のこころざしが正義と思えるほど自覚がないところも面白い。なお、50年代・60年代のカトリック世論の中で「規則にばかりこだわってはならない。こころざしこそ大事だ」とか言って、性的倫理などを考え直そうと促した声をも、パワーズは自覚防止の策として諷している。

[41] イエス様の処刑判決のとき、ローマのユダヤ総督ピラトが、自分に責任のないしるしとして手を洗ったとすることへの言及。新約聖書、マタイによる福音書 27 章 19 節, 24-25 節など参照。

[42] 「猫には9つの生命がある」（なかなか死なない）という言い伝えを踏まえている。

底本は *The Stories of J.F.Powers* (New York : The New York Review of Books, 2000)。